

## 1研究事例に基づく混合研究法の考察 A Study on Mixed Methods Research by Reviewing a Previous Research

中辻萬治

(桜美林大学加齢・発達研究所)

荒居和子

(桜美林大学加齢・発達研究所)

杉澤秀博

(桜美林大学大学院老年学研究科)

長田久雄

(桜美林大学大学院老年学研究科)

柴田博

(人間総合科学大学保健医療学部)

### 要旨

混合研究法は人の社会的な行動の複雑性に対応した研究方法の一つである。量的および質的の研究手法が互いに補足し合い、さらにそれらの研究結果が統合されて、リアリティに迫る知見がえられる。本研究では1つの研究事例でこれを示す。

事例とした研究の目的は傾聴ボランティアとして活動する人（活動者と呼ぶ）のプロフィールを明らかにすることである。まず量的研究で活動者の主体的、社会的条件を明らかにし、その結果からロジスティック回帰分析により、活動しないと推測されるが実際には活動している人々を特定し、それを対象に質的研究を行い、活動が内発的動機に基づくことを明らかにした。

2つの研究結果を統合して、活動者のプロフィールが主体的、社会的条件（量的研究結果）と内発的動機（質的研究結果）との多様な組み合わせであることを示すモデルを得た。これは混合研究法の特徴から得られた新たな知見である。

キーワード：混合研究法、量的研究、質的研究

### 1. 緒言

自然に比べて、人の社会的な行動ははるかに多くの要因の影響を受け、複雑である。佐藤<sup>1)</sup>は「社会や文化というとてもなく複雑な現象の解明には、『これが絶対で最善だ』といえるような理論も手法も（まだ）ない。社会や文化を適確に理解していくためには、理論、手法、対象

などさまざまな点で、できるだけ多様な方向から検討していかなければならない。」と述べ、多様な研究方法を採ることを求めている。

また今田<sup>2)</sup>も実際の社会現象が複雑であることを述べた上で、「リアリティを十全に把握するためには、すべての方法を動員しなければならないはずである。」と同様の考えを述べている。

しかし現在の社会学の研究は、いわゆる量的研究と呼ばれる仮説検証型の研究方法か、質的研究と呼ばれる解釈的パラダイムによる研究方法か、のいずれか一つの研究方法を採用しているものが殆どである。

かつてはこの2つの研究方法は依拠する哲学も認識論も異なるので、1つの研究に2つの研究方法を採用することはできないとの主張がなされていた。

しかし1990年前後から「パラダイム相対主義」の立場をとるプラグマティズムの影響を受け、1つの研究に両研究方法を採用することは可能と主張されるに至っている。

佐藤<sup>3)</sup>は「本書では、質的研究と量的研究とを根本的に相容れない両極の立場としてみるような視点はとらない。」と言い、「またもし質的研究と量的研究とのあいだに何らかの違いがあるにしても、それは『対立』や『矛盾』という意味での違いではなく、得手不得手ないし『得意分野と不得意分野』という意味での違いであると見ている。」と述べている。こうして近年、異質的研究方法を1つの研究に採用する研究方法が認められ、この種の研究が増加している。

このような研究をMixed Methods Researchと呼び、わが国ではこれを混合研究法、またはミクスト法と呼んでいる。これは佐藤や今田が提唱している人の社会的行動という複雑な研究対象に対応した研究方法の一つであると言える。

ではMixed Method Researchとはどのような研究なのか。Tashakkori & Teddlie<sup>4)</sup>は「Mixed Model Researchとはプラグマティズム・パラダイムの所産であり、研究課程の異なった段階で行う質的と量的のアプローチを総合した研究である。」と述べている。またCreswell & Clark<sup>5)</sup>は「混合研究法(Mixed methods research)とは、哲学的仮定と探究の研究手法をもった調査研究デザインである。研究方法論として、データ収集と分析の方向性、そして調査研究プロセスにおける多くのフェーズでの質的と量的アプローチの混合を導く哲学的仮定を前提とする。また、研究手法として、1つの研究、または順次的研究群での量的かつ質的データを集め、分析し、混合することに焦点をあてる。さらに、その中心的前提は量的・質的アプローチをともに用いるほうが、どちらか一方だけを用いるよりもさらなる研究課題の理解を生むことである。」と述べている。

混合研究法による研究の最大の特徴は、ここに述べられている研究課題の理解の深化である。佐藤が指摘するように、異なる研究方法が互いに補い合い、同じ研究対象からより広範で深い知見が得られ、研究対象のリアリティに一層迫ることが可能だからである。

しかし、それにはCreswell & Clark<sup>6)</sup>が指摘するように、「量的・質的データを単に収集し分析するだけでは不十分である。両者は何らかの方法で『混合される』必要がある。それによって片方だけを使うよりも研究課題のより完全な理解像を形成することができる」のである。

本研究の目的は、第1筆者が行った混合研究方法による研究<sup>6)</sup>(以下前研究と呼ぶ)を一つの事例として示し、二つの研究方法による相互補完と研究結果の統合から、混合研究方法を採用した研究では同一の研究対象からより深い知見が得られることを示すことである。

## 2. 前研究の説明

### 1) 研究目的と研究方法

前研究は日本で一番多く傾聴ボランティアを養成している特定非営利活動法人H協会のご協力を得て、2004年に行った。この研究の目的は、研修終了後実際に傾聴ボランティアとしての活動を行う人(以下活動者と呼ぶ)はどのような人か、を明らかにすることである。このような研究課題の背景には、次のような現象がある。

前研究を行った2004年8月までに、H協会は合計1,713人の養成講座修了生を送り出していた。しかしその中で活動者は半分にも達しないと協会は感じていた。数万円という多額の受講料を負担し、45時間に及ぶ講座を受けながら、なぜ講座修了後活動者がそんなに少ないのかという疑問と共に、活動者とはどのような人たちなのかということに、自身が修了生であり活動者である第1筆者は強い関心を持った。これを明らかにすることは、ボランティア活動の誘因、動機を明らかにすることでもある。

それで前研究は「活動者のプロフィールはどのようなものか」を研究課題として実施した。研究対象が人の社会的行動に関わる複雑なものであるので、冒頭に引用した佐藤<sup>1)</sup>、今田<sup>2)</sup>の指摘に従い、その複雑性に対応すべく量的および質的の両研究方法を採用する混合研究方法によって、リアリティに迫る研究を行うこととした。

混合研究方法では研究の過程での量的研究と質的研究との組み合わせ方の選択が必要となる。並行して行うか、順次に行うか、また順次に行う場合にはどちらを先に行うか、を定めなければならない。

前研究では、まず量的研究によって活動者の平均的な像を把握し、これを検討した上で、量的研究が持つ限界のために明らかにされていない部分を研究課題として質的研究を行うこととした。

### 2) 量的研究

#### (1) 目的

量的研究の目的は、上記講習会の修了生が「傾聴ボランティア活動をする」または「しない」という意思決定を行う場合、どのような要因が影響しているのかということ明らかにして、活動者のプロフィールを示すことである。

量的な研究については、第2筆者の荒居ら<sup>7)</sup>が「傾聴ボランティア活動に関連する社会的要因」という題目ですでに発表している。そのため、詳細は、この論文を参照いただきたい。

## (2) 本研究における荒居らによる論文の位置づけ

本研究で示す量的研究の分析枠組みは、荒居らの論文を踏襲している。そのため、言うまでもなくどの独立変数が有意な効果があるかといった量的研究のオリジナルな知見の帰属は荒居らによる論文にある。

しかし、荒居らの研究では、分析モデル全体の判別率には言及していない。本研究では、この判別率に着目し、独立変数への回答状況から「傾聴ボランティア活動をしている」と推測できるにもかかわらず現実には活動していない、あるいは逆に「傾聴ボランティア活動をしていない」と推測できるにもかかわらず現実には活動しているという、量的な分析枠組みから外れたケースを特定し、これに対する質的調査に基づき、混合研究法の有効性を提示しようと考えた。この点が本研究の量的研究におけるオリジナルな点である。

本来ならば、荒居らの論文の結果をそのまま引用すべきであるが、同じ量的な研究でも、前研究で依拠した分析枠組みが荒居らの論文と多少異なるため、前研究の分析枠組みとその結果を示したい。

なおこの量的研究を行うに当たっては、倫理面への配慮として、調査票に同封した調査協力依頼書に、得られたデータはプライバシーに配慮し、集団のデータとして処理することと、研究目的以外には使用しないことを記載し、調査票への記入を依頼した。回答が寄せられたことによって、この趣旨に同意の上記入し、協力いただいたものと解釈した。

## (3) 分析枠組みと結果

目的変数は「活動をしている」「活動していない」であり、説明変数はその意思決定に影響すると考えられるさまざまな要因である。このような要因としては、ボランティアの社会的優位性を主張する豊島<sup>8)</sup>などを参考に、特に社会的要因を重視して選定した。

分析項目の類型は、次の5分類、合計96項目から構成されている。

- ①現在傾聴ボランティア活動をしているか否かを問う質問、
- ②仮説に基づき選定したボランティア活動参加に関わると考えられる社会的要因、
- ③抑うつ状態、孤独感、生活満足感など本人の主体的状況、
- ④傾聴ボランティア活動に関連する項目、
- ⑤本人の基本属性

なお詳細は荒居らの論文を参照いただきたい。

目的変数となる質問は「現在、傾聴ボランティア活動をなさっていますか」であり、これに対する回答の選択肢の内「2. 活動していない」と「3. 以前していた」を選択した回答は、共に現在活動していないので、「活動していない」としてまとめ、全回答を「活動している」と「活動していない」に2分した。

目的変数となる質問を除いた95項目の質問に対する回答に有意差検定を行った結果、有意水準を5%として有意と認められた説明変数は表1の22項目である。

表1. 傾聴ボランティア活動と有意な関係がある項目とその活動有無別平均値

分類	質問	記号	活動有	活動無
(社会的要因)				
つきあい	友達とのつきあいは、どの程度ありますか	A	2.02	2.42
	近所つきあいは、どの程度ありますか	A	2.53	3.08
	親戚のつきあいは、どの程度ありますか	A	3.53	3.66
地域活動	町内会や自治会および地域活動には参加していらっしゃいますか	A	2.09	2.62
学習活動	市民講座や老人大学などの学習活動には参加していらっしゃいますか	A	2.15	2.44
ボランティア活動	傾聴以外のボランティア活動には参加していらっしゃいますか	A	2.04	2.67
(QOL尺度)				
	毎日気分よく過ごせますか	B	1.07	1.14
	家族とのつきあいに満足していますか	B	1.08	1.15
	将来に不安を感じていますか	B	1.59	1.49
	生きがいをお持ちですか	B	1.05	1.11
(老人用うつ尺度)				
	毎日の生活に満足していますか	B	1.15	1.23
	毎日の活動力や周囲に対する興味が低下したと思いますか	B	1.77	1.66
	たいていは機嫌よく過ごすことが多いですか	B	1.04	1.10
	自分が無力だなあと思うことが多いですか	B	1.64	1.54
	自分が活気にあふれていると思いますか	B	1.27	1.37
	周りの人が自分より幸せそうに見えますか	B	1.83	1.74
(傾聴活動関連)				
世間の理解度	傾聴ボランティア活動は地域でどのくらい理解されていると思いますか	C	2.98	3.14
自己効力感	あなたは今の知識と経験で傾聴ボランティア活動を十分にこなせると思いますか	C	2.25	2.58
	あなたは傾聴ボランティアとしての役割を果たせると思いますか	C	1.98	2.47
	現在のあなたは傾聴ボランティア活動で社会のニーズに答えていますか	C	2.19	3.32
(基本属性)				
職業の有無	現在収入のある職業をお持ちですか	B	1.66	1.51
同居家族数	同居しているご家族はあなたも含めては何人ですか	D	2.45	2.61

注) ①有意差検定は、クロス集計表を作成し、 $\chi^2$ 乗検定を用いた。

②記号欄の説明 各項目の英字は下記のような意味を持っている。

A：数字が小さい方が頻度が高い。

B：「はい」は1、「いいえ」は2、として統計処理をした。

C：数字が小さい方が肯定的。

D：数字は人数を示している。

活動者と非活動者との間に統計的な有意差があることを示した上記22項目を総合し、活動者の平均的なプロフィールを非活動者との対比で推測すれば、次のようになりそう。

まず、つきあいのいい人たちである。友達や近所、親戚との人付き合いが、活動していない人たちよりもいいことが分かる。そして地域活動や学習活動にもよく参加する人達である。傾聴ボランティア活動をしているだけでなく、それ以外のボランティア活動にも活動していない人たちよりもよく参加している。

このように活動的な人たちであるから、QOL尺度でも活動していない人たちよりも総合的に優れた状態にある。QOL尺度を個別に見ていくと、毎日気分よく過ごせる、家族とのつきあいに満足している、将来に不安を感じる事が少ない、生きがいを持っている、の各項目で活動していない人たちよりも優れている。

老人用うつ尺度も総合的により望ましい状態である。個別に見ていくと、毎日の生活に満足している程度が高く、毎日の活動力や周囲に対する興味が低下してきたとは思っていない。そしてたいていは機嫌よく過ごしている。活動していない人たちに較べて、自分に無力感を感じることが少なく、自分が活気にあふれていると思っている。周りの他人を見て、自分より幸せそうだとうらやむことも少ない。

また傾聴ボランティア活動は自分にとって重要だと思い、その活動をすることによって自分の力が発揮できていると思っている。そして活動していない人たちに較べて、傾聴ボランティア活動が地域で理解されていると思っている程度が高い。さらに自分の現在の知識と経験で傾聴ボランティア活動を行えるという自信も強い。そしてどちらかといえば職業を持たない人たちのほうが多く、同居家族数も少ない。

活動している人たちをしていない人と対比したとき、以上のような平均的プロフィールを量的研究の結果から描き出すことができる。

この結果は常識的にも納得できる。一言でいえば、元気で活動的、そして人付き合いのいい人たちが傾聴ボランティア活動に参加しているといえるのである。

### 3) 質的研究

#### (1) 量的研究結果から生じた新たな研究課題

今田<sup>2)</sup>は量的研究を「大量観察を基にしたデータを統計帰納法によって分析した平均的なリアリティを把握するもの」としている。これに従えば、上述の量的研究で把握できたのは、仮説に基づき選択した調査項目の中で統計的に有意とされるデータから推測される「平均的なリアリティ」像である。これは統計的に求められたものであるから、その判別率を考えれば活動者の中には、このような平均像から遠く離れた人がいるのは当然である。そのようなことを承知の上で、なお第1筆者は量的研究結果の「平均的なリアリティ」像に違和感を持った。

第1筆者自身が傾聴ボランティア活動を行う中で体験したことであるが、特に積極的な活動者の中にはこのような平均的なリアリティ像に合致しない人たちがいる。例えば自身が視覚障害者である人、家族に障害児を抱えて大変な日常生活を送っていると思える人、夫が癌患者で

介護を必要としている人、最近配偶者を亡くした人、などである。第1筆者はこのような体験から、この量的研究で得られた「平均的なリアリティ」は活動者の実態を説明するには充分ではない、何か欠落しているものがある、と感じた。

しかしこのような欠落感は第1筆者の体験に基づく主観的な感覚であり、妥当性は疑わしい。それで実際にこの平均像では説明し得ない活動者がどの程度いるのかを量的研究の結果から求め、そしてそれはどのようなプロフィールを持った人たちであるのか、を次に行う質的研究の課題とした。

## (2) 研究対象の選定

量的研究により得られた22の有意な項目のデータを利用してロジスティック回帰分析を行えば、「活動する」という現象が調査対象各人に発生する確率を推測することができる。つまり「活動するだろう」と推測される人と、「活動しないだろう」と推測される人との、調査対象全員を2分することができる。

ロジスティック回帰分析は、分析対象とした505の回答の中から欠損値のある127を除いた378の回答について行った。そして得られた予測値を、分割値を0.5として「活動する」「活動しない」に分割した。

こうして得られた予測値からのデータと、調査対象者から直接得た「活動している」「活動していない」の回答とを組み合わせると、調査対象を表2の4つのグループに分けることができる。

表2. 4グループへの分割とグループ別人数

グループ	推 測	実 際	該当する人数
グループ1	活動する	活動している	174人
〃 2	活動する	活動していない	65人
〃 3	活動しない	活動している	40人
〃 4	活動しない	活動していない	99人
合 計			378人

グループ1と4は推測と実際が合致している。しかしグループ2と3は合致していない。上述した量的研究でえられた活動者のプロフィールはグループ1を説明するものだと言える。しかし活動者の中にはグループ3の人もある。このグループの人は、上述したプロフィールには合致しない人々であり、その数は活動者の19%を占めている。これらの人たちのプロフィールを明らかにすれば、活動者のプロフィールをより深く理解できるはずである。

それで量的研究の結果からは「活動しない」と推測されるが実際には「活動している」人のプロフィールとはどのようなものか、を研究課題として研究を行うこととした。

この場合研究方法としては箕浦<sup>9)</sup>のいう「仮説生成法」を採用する必要がある。箕浦によれ

ば、「仮説生成法」とは「未開地を一から開墾し新しい知を生み出していくタイプの研究」であり、「社会的現実を観察することから新しい仮説を生成することを目指す」研究方法である。

### (3) 質的研究の方法

採用したのはKJ法<sup>10)</sup>に準じた研究方法である。研究対象となるサンプルを決め、インタビューによってなぜ自分が傾聴ボランティア活動をしているのかに関する考えを自由に発言してもらい、その発言の要点をデータとして収集し、それをグループ化し、さらにグループ間の関係を示す関連図を作成し、それを文章化するという方法を採用した。

### (4) サンプリング

調査対象としたのは表2のグループ3に属する人々、つまりロジスティック回帰分析では「活動しない」と推測される活動者である。

グループ3は40人であるが、その中から次のような方法で対象者を選定した。まず倫理面の配慮である。量的研究の調査票を送付したときに、インタビュー方式による追加調査に対する協力依頼書を同封した。それには「このアンケート調査の後、さらにインタビューによる調査を予定しています。これにもご協力いただける方は、同意書にご記入の上、ご返送下さい。」という趣旨の文を記載した。そしてこの同意書を返送した人を面接対象として選んだ。

次にその中から推測値の低い順に、面接の優先順位を設けた。つまりできるだけ極端な例を選ぼうとしたわけである。その方が「ものごとの本質を認識」(今田<sup>2)</sup>)しやすいと考えたからである。

さらに調査にかかる費用や時間も考慮した。それで東京都、神奈川県、千葉県、埼玉県に居住する人びとを選んだ。

こうして調査対象者を決め、電話で本人のインタビュー調査への協力の意思を再度確認し、面接調査の日時と場所を決めた。対象者に会いインタビューを始める前に、倫理面への配慮として、発言を記録し、KJ法に準じた方法でその発言を処理することを説明すると共に、調査対象者を特定できないよう匿名性を保持すること、さらに研究目的以外には使用しないことも説明し、面接調査への同意を得た。

2005年4月3日から6月8日の期間に13名に面接調査を行った。男子4人、女子9人、平均年齢は63.5才であった。

### (5) データの収集と1行見出しの作成

面接調査は第1筆者が行った。「なぜ傾聴ボランティア活動をしているのか」にかかわると本人が思うあらゆる事柄を自由に述べてもらった。そしてその場で発言の内容を一区切りごとに区切り、それを圧縮して「1行見出し」を作り、名刺大の紙に記録した。紙片の数は合計98枚となった。面接時間は一人当たり大体1時間弱である。この作業の妥当性を後日チェックできるように、被調査者の了解が得られた場合には、面接を録音した。

(6) グループ編成と表札作り

面接調査から得られた98枚の紙片に記入されたデータを、次にグループに編成した。その方法としては紙片をランダムに広げて置き、それを読みながら内容に親近感を覚える紙片同士を近くに集め、紙片の小チームを作った。この作業が終わったところで各小チームの内容を圧縮して1行で表す「表札」を作った。小チーム作りが終わった後、親近感のある小チームをまとめて、中チームを作り、表札をつけ、さらに親近感のある中チームをまとめて大チームを作り、表札をつけた。

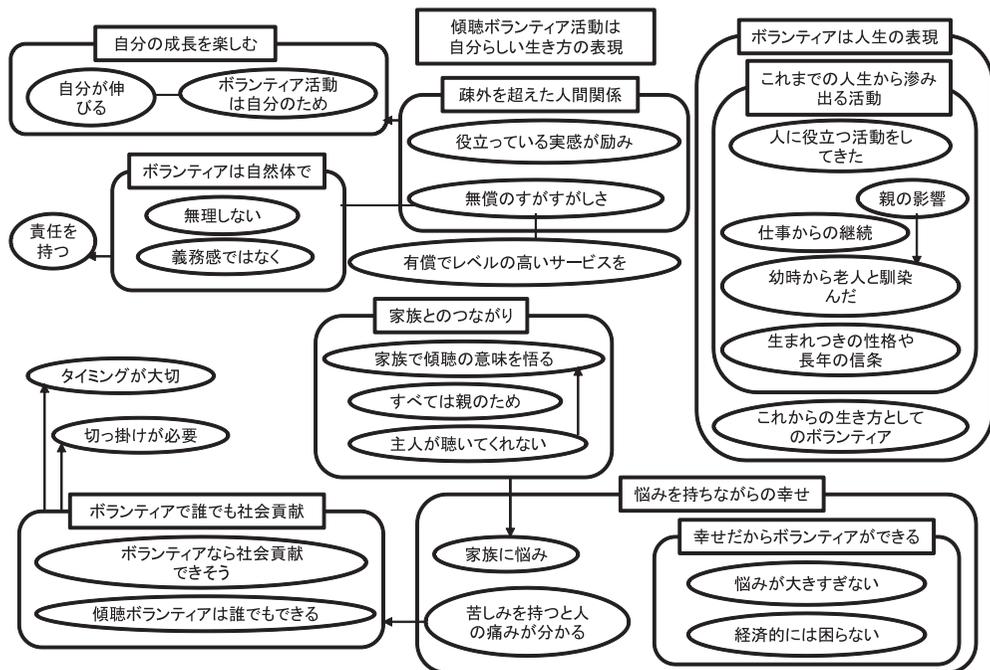


図1. グループ3の面接結果の関連図

(7) 図解・関連図

まとめられた紙片のグループを相互の関係をうまく表すように空間的に配置した。こうしてグループ間の関係を図示した関連図(図1)を作成した。

(8) 文章化

KJ法では次に関連図全体を文章化するが、ここではその中のロジスティック回帰分析で「活動しない」と推測されている人々がなぜ活動しているのかに関連する部分に焦点を当てて文章化した。【 】内はグループの表札、あるいは1行見出しである。

関連図全体を一言で表せば【傾聴ボランティア活動はその人らしい生き方の表現】であり、【ボランティアは人生の表現】でもある。思いつきや人から誘われて始めるものというよりも、【これまでの人生からにじみ出る活動】である。弱者の味方になりたいというような【性格や信条】があったり、幼少の頃から人を助ける親の姿を見ていた【親からの影響】があったり、祖母に育てられて【幼児から老人に馴染んだ】経験があったり、福祉関係の仕事や善意の人助けの活動など【人に役立つ活動をしてきた】というような、これまでの人生が背景にある。

また定年退職後【老後の生き方としてのボランティア】を考えるとというように、今後の人生設計の中にボランティア活動が位置づけられていることもある。

では自身が幸福だからボランティア活動ができるのだろうか。これに関する意見をまとめたのが【悩みを抱えながらの幸せ】である。確かに【幸せだからボランティアができる】のであって、【経済的には困らない】状態なのだが、この「幸せ」は単純な幸せではない。

被調査者の中には悩み事や苦しみを経験している人が多い。自分自身や家族が病気であったり、親や家族の介護に忙しかったり、精神的にも肉体的にも、悩みがある中でボランティア活動をしている人が多い。しかし【悩みが大きすぎない】必要はある。家族や病気の心配ばかりしては、ボランティア活動はできない。

ではなぜ自分自身や【家族の悩みを超えてのボランティア活動】をするのだろうか。ボランティア活動は自分の生き方の表れであるから、少々の悩みや苦しみがあっても、それを乗り越えて自己実現としてのボランティア活動ができる。しかし、決して片意地を張ってしているわけではない。【義務感ではなく】【無理しない】で、【ボランティアは自然体で】行っている。

では悩みや苦しみを抱えながらも、自然体でボランティア活動ができる理由は何であろうか。まず第1は【苦しみを持つと人の痛みが分かる】からである。悩み、苦しんでいる人に、容易に共感できる。

第2に【役立っている実感が励み】となり、クライアントの笑顔や感謝の言葉に無上の喜びを見出し、そこに【疎外を超えた人との関係】を感じ取れるからである。ボランティア活動の中に日常生活の中での人間関係とは異なる、利害得失を超えた、人間としての純粋な関係を感じている。

そして第3の理由として【自分の成長を楽しむ】気持ちがある。【自分が伸びる】のだから、【ボランティア活動は自分のため】である。活動の中で自分の成長を感じ、それが嬉しい。

これらの意見を述べた人びとは、自分で悩みを克服した後に、あるいは克服していく過程で、ボランティア活動を実践している。悩みの克服とボランティア活動とが、密接につながり、一体化している。ボランティア活動が内発的動機によって行われていると言える。そのような人の姿をこの質的研究から見出すことができた。

#### 4) 量的研究と質的研究の統合

活動者は、表2のグループ1およびグループ3に属する人たちである。量的研究で明らかにしたのは、グループ1の人々のプロフィールを構成する「好ましい主体的・社会的条件」であ

る。「好ましい主体的・社会的条件」が整っておれば活動する、と考えられる活動者のプロフィールである。

他方質的研究が明らかにしたのは、グループ3の人々のプロフィールである。それは量的研究の結果とかなり対立している。【家族の悩みを超えてのボランティア活動】に集約的に示されているように、量的研究の結果からは「活動しない」と考えられる条件を抱えながら、それを乗り越えて活動している人々のプロフィールである。

では悩みを乗り越えて活動させている要因は何であろうか。それはその人が活動に認めている価値である。【傾聴ボランティア活動は自分らしい生き方の表現】と捉えているからである。つまり自分の生き方としての「内発的動機」があるから、量的研究でえられた「好ましい主体的・社会的条件」が欠けていても活動できるのである。

他方質的研究でえられた【悩みが大きすぎない】というコンセプトには、悩みが大きすぎるとは活動できないという、活動に好ましい条件が示されている。このように相互に共通する要因も見られる。

ここで「好ましい主体的・社会的条件」と「内発的動機」という量的および質的研究から得られた知見を統合しなければならない。図2がそれを示している。

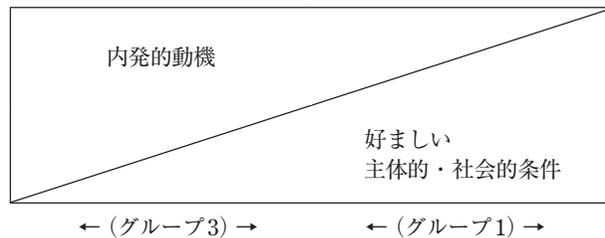


図2. 傾聴ボランティア活動の意思決定に影響する要因のモデル

この図の縦軸は、傾聴ボランティア活動を行うと意思決定する場合に影響する2つの要因、「内発的動機」と「好ましい主体的・社会的条件」の割合を示している。また横軸は活動している人を、この割合の順に並べた列である。

傾聴ボランティア活動に強い内発的動機を持ち、いろいろな困難を抱えていてもそれを乗り越えて活動を行う人(グループ3)はこの図の左端に近いところに位置づけられる。他方、内発的動機は弱くても、生活や時間に余裕があり、人付き合いもよく、傾聴ボランティア活動を気軽にしているという人(グループ1)はこの図では右端に近いところに位置づけられる。

2つの異なった研究方法による研究結果を統合することにより、このようなモデルが得られ、活動者のプロフィールをより豊かに表現することができた。

### 3. 前研究の方法論的考察

#### 1) 混合研究法による研究の利点

Creswell & Clark<sup>5)</sup> は混合研究法による研究の利点を次の4項目としている。

- ①量的研究と質的研究が互いの弱点を補い合う。
- ②量的研究、質的研究のどちらかだけのデータ収集方法に限定されない、幅広い論拠を利用できる。
- ③どちらか1つの研究方法論を超えた知見が得られる。
- ④人の社会的行動に関して科学的に研究する者として、量的研究と質的研究に分断することは両者の協働を妨げ、研究の幅を狭めるだけである。

さらに「量的・質的データを単に収集し分析するだけでは不十分である。両者は何らかの方法で『混合される』必要がある。それによって片方だけを使うよりも研究課題のより完全な理解像を形成することができる。」とも指摘している。

これを要約すれば、混合研究法の利点は次の2点にあると言えよう。

- ①異質の研究方法による相互補完作用
- ②異質の研究結果の統合から創造される新たな知見

まずこのような利点を活かして、混合研究法としての研究成果を高める前提ともなるのが量的データと質的データとの差異である。それで、それぞれのデータの特徴を、混合研究法の観点から優劣として対比し、示しておきたい。

量的データ

【質的データに比べて優れている点】

- ①適切なサンプリングによる被調査者の選定によって、母集団の全体像をかなり正しく認識できる。(調査票の回収率によっては、歪んだものになる危険性を孕んでいる。)
- ②統計的に処理できるので、結果の妥当性を統計的に検証できる。

【質的データに比べて劣っている点】

- ①調査前に設けた仮説から導き出された調査項目で得られるデータしか収集できない。また得られるデータは、数量化して統計的に処理できる closed-end のデータに限られる。
- ②対象を動的に把握するデータが得がたい。

質的データ

【量的データに比べて優れている点】

- ①インタビューなどから得られるデータは量的データに比べてはるかに濃密であり、リサーチクエスションの本質に迫ることができる。
- ②質的研究方法は調査の過程で得られた情報によって、調査方法を改善しながら研究を進めることが出来るので、得られたデータはリサーチクエスションにより適したものとなる。

【量的データに比べて劣っている点】

- ①データの処理には研究者の解釈が入るので、解釈の妥当性に細心の注意を払う必要がある。
- ②被調査者が少数であり、代表性が保証されていないので、データに偏りが伴う恐れがある。

## 2) 採用した混合研究法のデザイン

混合研究法を実施するためには、リサーチクエスションに適合した混合研究のデザインを採用する必要がある。

次に前研究について、どのような研究デザインを選択したかということと、その研究デザインによって上述した混合研究法の利点2つがどのように活かされているかということを確認したい。

Creswell & Clark<sup>5)</sup>によれば、研究デザインとは研究においてデータを収集し、分析し、解釈し、報告する手順のことである。この書では混合研究法を以下の6つのデザインに分類している。

The convergent parallel design (収斂型デザイン)

The explanatory sequential design (説明型デザイン)

The exploratory sequential design (探求型デザイン)

The embedded design (埋め込み型デザイン)

The transformative design (変革志向型デザイン)

The multiphase design (多フェーズ型デザイン)

前研究の研究手順はこの中の説明型デザインである。著者によれば説明型デザインとは次のようなものである。「このデザインは、調査研究者が量的結果に基づいてグループを形成し、グループを基に次の質的調査研究でフォローアップ調査をしたいとき、あるいは質的フェーズのための役立つサンプリングを導けるよう量的参加者の特徴を利用したいとき、に適用することができる。」

つまりこのデザインは量的研究が質的研究に先行し、量的研究結果を次の質的研究に利用するところに特徴がある。これは前研究の方法に合致している。

この書では説明型デザインにはその変形型として、フォローアップ調査説明モデルと参加者選定モデルがある、としている。前者は量的研究結果に重点が置かれ、それをさらに深く説明するために、質的研究が行われる。他方参加者選定モデルは、深い質的研究のための参加者を選定するために量的情報が用いられる。つまり両者の差は量的研究と質的研究のどちらに重きを置くか、という違いである。前研究の場合、量的研究と質的研究の両方の研究結果を対等に扱い、統合して混合研究法としての研究結果を求めたので、どちらの変形型にも分類できない。

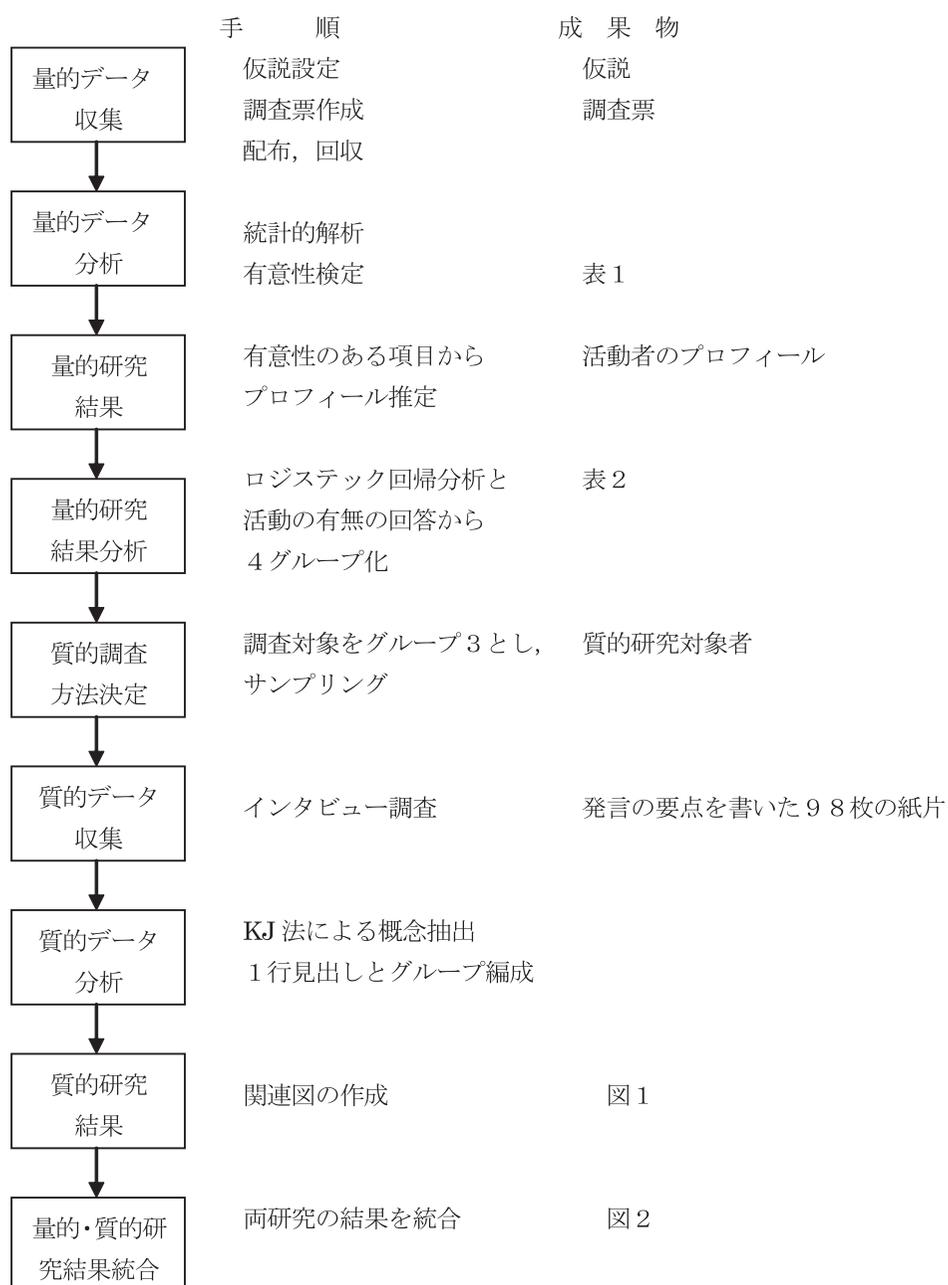


図3. 前研究の視覚的ダイアグラムと手順, 成果物

前研究の研究手順と各段階の成果物を視覚的ダイアグラムで示すと、上図ようになる。

### 3) 異質の研究方法による相互補完作用

#### (1) 量的研究の特質と限界

量的研究を今田<sup>2)</sup>は「大量観察を基にした平均的なリアリティ」を求めるものと述べているが、その方法は要素還元主義を基礎とした論理実証主義的研究方法である。従って、前研究の量的研究では次のような手続きを採った。

まず仮説を設定し、活動者の活動の要因となると考えられるさまざまな社会的、主体的要素から仮説に関係すると考えられる96項目を選択し、調査項目とした。そして活動の有無を目的変数とし、それと統計的に有意とされた22項目を得た。そしてこの22項目を集めてプロフィールを想定した。このような手続きを経て研究結果は得られている。従ってこの研究結果には次のような限界があると考えられる。

人の行動に関わる重要な要因であっても、仮説から演繹的に推測しがたく、要素に分解の上、閉じられた質問として調査項目にしがたいものは、調査ができず、従って認識しえない。

これまでの人生の中で形成された信念や人生観などは人の行動を規定する重要な要因と普通には考えられるが、量的研究では把握に困難を伴うものが多い。質的研究で抽出された多くのコンセプト、例えば「ボランティアは人生の表現」、「悩みを抱えながらの幸せ」、「疎外を超えた人との関係」などは、量的研究では把握するのが容易ではない。

生身の人間の姿を、さまざまな要素に分解せず、ホーリスティックに把握するということが難しいという限界が量的研究にはある、と言える。

#### (2) 質的研究の特質と限界

質的研究は、下田<sup>1)</sup>のいう「社会現象は行為者の有意味的な『主観性』を離れては把握しえないという」パラダイムによる研究である。これは今田<sup>2)</sup>のいう「意味解釈法」であり、「『特殊』で『個別』なリアリティの意味認識を、解釈法によって了解可能な存在(経験)に接続する方法である。また、そうすることで、ものごとの本質を認識する作業」である。

前研究ではサンプルとなる複数の活動者をインタビューすることによって、傾聴ボランティア活動を行う有意味な「主観性」を聞き取り、そこに含まれる意味をインタビュアーが解釈して抽出し、コンセプトを形成した。そして現象を説明できるようコンセプト間に関係をつける、という方法で活動者のプロフィールを得た。

質的研究は多くの場合このような方法を採用するので、研究結果に偏りやひずみを生じる危険がある。その1つは量的研究に比べてサンプル数をはるかに少ないので、そのサンプルが母集団を正しく代表しているかという点である。

また質的研究はインタビュアーの主観が大きな役割を演ずる研究であるから、インタビュアーの「理論的感受性」の感度や、意味をとらえ、解釈する過程が自身の価値観などに影響されず、適切であるかも重要な点である。このような2つの点がこの研究方法に伴う限界となる。

このような量的研究と質的研究が持つ限界が、前研究では混合研究法を採用することによってどのように補完されているのかを次に検討したい。

### (3) 質的研究による量的研究の補完

量的研究の結果を判別分析し、実際の活動の有無と対比させて4グループに分類し、表2を作成した。ここまでは量的研究の領域である。

しかしなぜ統計的な推論と実際との間に不一致が生じるのか、なぜ統計的には活動しないと推論される人々が活動しているのか、これを量的研究からは説明することはできない。これを明らかにするには、量的研究では把握が難しい活動者の主観を明らかにする必要がある。この点を質的研究が補った。質的研究の結果から主体的、社会的条件が好ましくなくても活動しようとする意欲が生ずる理由を明らかにすることができた。それは【傾聴ボランティア活動は自分らしい生き方の表現】だから内発的動機が生ずるのである。このようにして質的研究は量的研究を補った。

### (4) 量的研究による質的研究の補完

他方量的研究が質的研究を補完した点を検討してみたい。

#### ①平均値から逸脱した活動者の認識

量的研究では活動者の平均像が得られた。これが得られたから、第1筆者はそれとの対比で平均像から逸脱した活動者の存在を認識することができた。そして「そのような活動者とはどのような人々なのか」という質的研究の研究課題を設定することができた。

#### ②質的研究の研究課題の明確化

量的研究のデータを利用して判別分析を行い、表2を作成した。そして質的研究の研究対象とすべきグループ3を明確にした。このグループがなぜ活動しているのかというのは量的研究では明らかにしえない部分である。このようにして質的研究で解明すべき研究課題を明確にすることができた。

ただグループ1についても同様の質的研究を行えば、量的研究と質的研究の統合にさらに役立つデータが得られたものと思われる。

#### ③質的研究のサンプルの代表性の確認

多くの質的研究では、その代表性に深い注意を払い、サンプルが選択されているとは言い難い。サンプルの代表性に疑問が投げかけられることもある。

Willig<sup>12)</sup>は質的研究のデザインを述べる中で、「研究が、実際に研究の対象となる人々よりも多くの人々に関する現象を探求する場合、代表性が問題となる。」と指摘している。つまり、研究の結果がどの程度一般的なものであるかという程度を示す外的妥当性は、サンプルの代表性に依存しているということである。

前研究では質的研究を量的研究と結びつけることによって、サンプルの代表性について客観的な判断ができた。ロジスティック回帰分析によって、研究対象全員について「傾聴ボランティアとして活動する」という現象が起きる推測値を求めた。この値によってサンプルの位置づけができ、サンプルの代表性という問題に1つの解決を与えた。これは質的研究の妥当性の改善にもつながっている。

#### 4) 量的研究と質的研究の研究結果の統合

##### (1) 異質の研究方法の結果を統合する哲学的な基礎

論理実証主義を基盤とする量的研究と社会構築主義などを基盤とする質的研究は、存在論においても、認識論においても、異質な哲学をその背景としている。故に両者を一つの研究において採用することは不可能と言われてきた。

しかし1990年前後から「パラダイム相対主義」の立場をとるプラグマティズムの影響を受け、この考えを否定する主張が現れた。プラグマティズムは方法論的多様性を主張する。Morgan<sup>13)</sup>はその最終章で「プラグマティズムが新しい可能性を開いた」と述べて、既存の方法論的概念との対比で次表の右端に示す3つの概念を提示している。

表3. 社会科学研究方法論の中核的概念に対してプラグマティズムが提示する代替概念

	質的研究方法	量的研究方法	プラグマティズム的研究方法
理論とデータとの関連	帰納法	演繹法	Abduction (発想法)
研究過程への関わり方	主観的	客観的	Intersubjectivity (間主観性)
データからの推論	文脈	普遍性	Transferability (転用可能性)

彼の主張の基本は、実際に研究を行う際には、何か一つのパラダイムに固執することなく、ここに示されている対立する概念間を行ったり来たりして研究している、という研究実態の方法論的多様性にある。

例えば「理論とデータとの関連」では次のように述べている。「帰納と演繹の峻別は初心者教えるには役立つ。しかし経験のある研究者であれば、誰でも理論とデータとの間の実際の動きは一方向だけではないことを知っている。あたかも研究には純粋な帰納か演繹しかないかのようにわれわれが振る舞うのは、研究論文を書いている時だけである。」そしてこの実態をAbductionと呼んでいる。なおこのAbductionという概念はプラグマティズムの元祖の一人とされるパーズが、弁証法の類似概念として使ったと言われている(上山春平<sup>14)</sup>)。Abductionを弁証法と理解すれば、Morganの主張は理解しやすい。

プラグマティズム的思考に立てば、研究課題に対して答えるために研究者は柔軟にさまざまな研究方法を採用すべきだということになる。

## (2) 前研究での統合と新たな知見の創造

前研究の量的研究が明らかにしたのは、「好ましい主体的・社会的条件」が整ってあれば活動する、という活動者のプロフィールである。他方質的研究が明らかにしたのは、そのような条件が整っておらなくても、傾聴ボランティア活動に自分の生き方としての価値を認めれば、内発的動機で活動するという活動者のプロフィールである。

この2つのプロフィールが必ずしも対立するものではないことは、質的研究の中に【悩みが大きすぎない】というコンセプトがあることから分かる。悩みが大きすぎるとは活動できないという、量的研究の結果と通底する要素がそこには見られる。

質的研究は今田のいう「意味解釈法」であり、「ものごとの本質を認識する作業」である。だからこの質的研究から得られた「内発的動機」は、ボランティア活動の本質として誰もが程度の差はあれ、持っているものと考えられる。ボランティア活動においては内発的動機が大きな要因となっていることは、田中<sup>15)</sup>や田尾<sup>16)</sup>など多くの論者の指摘するところである。

このような共通するものを図として示したのが図2である。対角線を挟んで量的研究結果の「好ましい主体的・社会的条件」と質的研究結果の内発的動機が入る。この図によって活動者には二つの要素の強弱様々な組み合わせというプロフィールが見られるのではないかという知見を得ることができた。これは二つの研究結果を統合することにより得られた新たな知見である。

本研究で取り上げたのは1つの研究の事例でしかない。しかし混合研究法が持つリアリティ把握の優れた特性の一端は明らかにできたのではないかと思う。

本稿の「2. 前研究の説明」は第1筆者の修士論文<sup>6)</sup>の「第4部 傾聴ボランティア研修受講者を対象とした研究」を基にして記述したものであることを記しておく。

## 文献

- 1) 佐藤郁哉：フィールドワーク：書を持って街へ出よう。初版、新曜社、東京（1992）。
- 2) 今田高俊：リアリティと格闘する（今田高俊編）リアリティの捉え方。初版、1-46、有斐閣、東京（2000）。
- 3) 佐藤郁哉：質的データ分析法。初版、新曜社、東京（1992）。
- 4) Tashakkori Abbas and Teddlie Charles: Mixed Methodology. 1st ed., Sage Publications Inc., Thousand Oaks (1998).
- 5) Creswell & Clark: Designing and Conducting Mixed Methods Research. 2nd ed., Sage Publications Inc, Thousand Oaks (2011).
- 6) 中辻萬治：Mixed Methodologyによる傾聴ボランティア活動の研究。桜美林大学国際学研究科修士論文（2005）。
- 7) 荒居和子、兪 今、長田久雄：傾聴ボランティア活動に関連する社会的要因。応用老年学、3（1）：45-53（2009）。
- 8) 豊島慎一郎：現代日本における社会参加と社会階層。大分大学経済論集、52（3）：117-145（2000）。

- 9) 箕浦康子：フィールドワーク。初版，中央公論社，東京（1998）。
- 10) 川喜田二郎：発想法。初版，中央公論社，東京（1967）。
- 11) 下田直春：社会学的志向の基礎。初版，新泉社，東京（1987）。
- 12) Carla Willig: *Introducing Qualitative Research in Psychology*. 1st ed., Open University Press, Buckingham (2001).
- 13) David Morgan: *Paradigms Lost and Pragmatism Regained; Methodological Implications of Combining Qualitative and Quantitative Methods*. *Journal of Mixed Methods Research*, 1:48-76 (2007).
- 14) 上山春平：弁証法の系譜。初版，未来社，東京（1963）。
- 15) 田中尚輝。ボランティアの時代。初版。岩波書店。東京（1998）
- 16) 田尾雅夫。ボランティアを支える思想。初版。アルヒーフ。東京（2001）

## A Study on Mixed Methods Research by Reviewing a Previous Research

Manji Nakatsuji

(Institute of Aging and Development, J. F. Oberlin University)

Kazuko Arai

(Institute of Aging and Development, J. F. Oberlin University)

Hidehiro Sugisawa

(Area of Gerontology, Graduate School of J. F. Oberlin University)

Hisao Osada

(Area of Gerontology, Graduate School of J. F. Oberlin University)

Hiroshi Shibata

(Faculty of Health Sciences, University of Human Arts and Sciences)

**Keywords:** Mixed methods research, Quantitative research, Qualitative research

Most studies in the field of sociology employ either quantitative or qualitative research methods. However, studies on human behavior require research methods that correspond to the complexity of the subject. Mixed methods research employs both quantitative and qualitative research methods within a single study in order to cope with the complexity of the subject. The purpose of this study was to show how quantitative and qualitative research methods supplement each other in mixed methods research and how the findings obtained through both research methods can produce deeper insights into reality when integrated. In order to illustrate the above mentioned characteristics of mixed methods research, a previous study on listening volunteer's profile conducted by the first author was used. In the study, quantitative research was conducted first targeting 505 people to profile actual listening volunteers. The data obtained described the profile as active in daily life, sociable, and physically and mentally healthy. Then, qualitative research employing the KJ Method and interviews with 13 people revealed the profile of those who were unexplainable according to findings from the preceding quantitative research, that is, not acting from the point of view of statistic inference, but actually working. What the qualitative research revealed was that spontaneous motivation is essential for listening volunteer activity. By integrating these two findings from both studies, a deeper insight into the profile was obtained.